

キャラクター名  
知念シジマ (ちねんしじま)

プレイヤー名

シンドローム	モルフェウス		ワークス	UGN支部長C	カヴァー	古本屋の店主
	モルフェウス					
オプション			年齢	20歳	性別	男
覚醒	恐怖	衝動	恐怖	初期侵食率	34 %	
出自	疎まれた子 (CRC P84)	経験	大失敗 (CRC P85)	邂逅	殺意 (CRC P86)	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	20
肉体	2	0	0			2	行動値	9
感覚	4	0	0			4	(非装備時)	9
精神	0	1	0			1	戦闘移動	14
社会	2	0	0			2	全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	1		交渉		
回避			知覚			意志	3		調達	1	
運転:			芸術:			知識:クトゥルフ	2		情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
贖作王の秘本	
九生足 (※贖作王の秘本で取得)	
パワーピストル	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
超能力者<サイオニクス>	P	N		
前任の支部長	P 恩人	N 不安		
太陽を嫌うジャーム	P 好奇心	N 脅威		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6    残り財産P: 3

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
サイコブースト	2	HP2	マイナ	至近	自身	自動	サイニック	
効果: そのメインプロセスで行うサイオニックを用いたメジャーアクションのC値-LV。このサイオニックのLVは、あなたの<意志>+2 (最大3) に等しい。								
サイコキネシス	4	HP3	Xジャー	LV×5m	単体	意志/対決	サイニック	
効果: 動かすことができる物体は「【精神】×LV×LV」kgまで。浮かばせた物体を叩きつけるなどして攻撃する場合は攻撃力+LVの射撃攻撃として扱う。								
砂の加護	5	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果: 判定ダイス+[LV+1]個。1ラウンド1回。								
砂塵霊	5	3	オート	視界	単体	自動	リミット	
効果: 砂の加護を使用した対象がそのメインプロセスで行う攻撃の攻撃力を+[LV×4]する。								
オリジナルツール	5	3	オート	至近	自身	自動	100↑	
効果: 使用時に技能を1つ選ぶこと。そのラウンド間、あなたが行うその技能の判定の達成値を+[LV×2]する。1ラウンド1回。								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

※※ゆとシートの下書きです。キャラシはゆとシートにあります※※

一人称: ぼく/二人称: あなた/大人しいタイプのおどおど系を想像中

『「ヤディスからの幻視」…? ああ、あの魔導書は、とある人に売りました。とても大切にしてくれそうだったので…」  
「いらっしやいませ。どうぞ、心安らかなひとときを」

BookCafe「マグメル」はネット通販もやってる古書専門のブックカフェ。裏では魔導書を取り扱っており、信の置ける人物には魔導書の売買も行っている。マンハッタン悲劇以降、行方をくらました前任の支部長に代わって、支部と古本屋を切り盛りしている。

助けを乞えるものにはなんだって助けを求める性格。

<過去>  
物心ついた頃からぼくは物を動かす超能力が使えた。  
両親はいたく喜んだ。言われるがままにTVで超能力を披露した。  
番組の人たちも、両親も、学校の友達も、みんなみんな喜んでくれた。  
次はもっと大きな物を動かして欲しい、物を動かすだけではつまらないから透視をしてほしい、大丈夫、君はこの数字を読み上げるだけでいいんだ……  
それが八百長であるとは知らず、両親が、大人たちが、皆が喜んでくれるならと、喜んで引き受けた。  
それも次第に飽きられ始めた頃、次に待ち受けていたのは、ぼくの超能力のハッターを暴くというコーナーだった。  
やらされたのは透視だった。答えを覚えてくれる人は誰もいなかった。当然だよな。  
あなたの超能力は嘘ですよ? 本当はそんな力ないんですよ? なのに私達を騙していたんですよ?